

ギド・フルベッキ (ガイド・ヘルマン・フリドリッヒ・フェルベッキ) 略歴

～オランダに生まれアメリカ合衆国へそして我が国へ渡来～

- 1830 オランダ、ユトレヒト・ザイスト生まれ キリスト教モラビア派で洗礼。
1852 9月、渡米 ウィスコンシン州・造船工場で働く。
1853 ニューヨーク州⇒アーカンソー州・ミシシッピー川橋梁建設に従事。
1854 夏、コレラ病を機に宣教師を志望。
1855 ニューヨーク州オーバン神学校入学。
1859 同 神学校卒業 3月米国オランダ改革派教会宣教師。
4月、マリア・マンヨンと結婚 5月サプライズ号でニューヨーク出航。
11月、同僚サミュエル・R・ブラウン、ダン・B・シモンズと共に上海経由来日。
ブラウンとシモンズは先に神奈川へ上陸。
11月、フルベッキは長崎に単身で上陸。
12月、マリアを上海より呼び寄せ。
1860 1月、長女エンマ・ジャポニカ誕生するも一週間で夭折。

～キリシタン禁制の高札～

- 1861~1862 キリスト教宣布できず、私塾で英語教師、佐賀藩 副島種臣、大隈重信
が英語講義を受ける。自宅で聖書バイブルクラス開講。
1863 (文久3年) 横浜・生麦事件発生。薩英戦争勃発により一時上海に避難。
1864 長崎に戻り、「済美館」(1863幕府設立の長崎英語伝習所、洋学所、広運館ともいう)
に雇用される。生徒に何礼之、平井希昌、大山巖) フルベッキ集合写真はこの頃?
1865 (慶應元年) 長崎に佐賀藩が洋学派の為に「致遠館」開設。舎長・副島種臣、補佐・
大隈重信。親交のある鍋島直正から校長として招請され、[済美館]の教師と兼務。

～フルベッキの生徒たち～

「済美館」「致遠館」の教えを受けた者

- 相良知安 (弘庵) 東京大学医学部の前身「大学東校」にドイツ医学採用。
山口尚芳 東京大学法学部・文学部の前身「開成学校」教頭にフルベッキを
招請、欧米視察「岩倉使節団」副使。 外交官。
小出千之助 万延元年遣米使節随員・通訳。
石丸安世 工部省・造幣局を担当。
他に 前島密、陸奥宗光、安保清康、高峰讓吉 (加賀藩)。
1868 (明治元年) 開成学校 (旧幕府開成所) 教師。

- 1868 6月、大隈重信に「日本の近代化についての進言」ブリーフ・スケッチ提案
大隈は翻訳書を岩倉具視に提出。
- 1869 2月、明治政府より大学設立のため出仕要請を請け上京。
12月、開成学校を「大学南校」と改称。
- 1870/10～1873 「大学南校」教頭。(1873 開成学校と再改称)
「大学南校」時代の生徒に高橋是清。(仙台藩士)
- 1871 11月、欧米視察のための使節団「岩倉使節団」派遣。
- 1877 (明治10年 47歳) 9月、官職を辞す 勲三等旭日章を授与。

～念願だった宣教活動再開～

- 1878 7月、米国へ一時帰国。
- 1879 宣教師として再来日。
- 1886 (明治19年) 明治学院開学、 理事。
- 1887 明治学院神学部教授。
- 1888 明治学院理事長。
- 1898 (明治31年) 3月10日 赤坂葵町自宅にて死去 享年68歳。
3月13日 芝日本基督教会にて葬儀、青山墓地に埋葬。

日米友好の先頭に立った長男ウィリアム・フルベッキ

1909 (明治42年) 秋、アメリカ合衆国商業会議所の招待を受け、東京、大阪等6大都市の商業会議所、民間人51名の団体が渋沢栄一を団長として訪米し3ヶ月にわたり主要都市を訪問した。明治天皇と親しく大の親日家であったW・H・タフト大統領もミネソタで歓迎。当時問題となっていた日本移民排斥運動の中、日米貿易の新時代がスタートした。経済使節団一行をニューヨーク州シラキュース市の駅頭で流暢な日本語で出迎えたのがフルベッキの長男、マンリアス・ミリタリースクール校長、ウィリアムであった。歓迎晩さん会の後別室で日露戦争の映画を鑑賞した渋沢栄一は、学生に交じって白馬に乗って日本軍を指揮していたのがウィリアムだったのを見て驚いたと書き記している。当時のミリタリースクールには江副廉蔵の息子、隆一が留学していた。

21年後の1930 (昭和5年) 日本から経済使節団を迎える直前、ウィリアムは帰らぬ人となったが、校長となって42年間その優れた教育と人格で多くの有望な人材を輩出した彼を知るニューヨーク州知事フランクリン・D・ルーズベルト (第32代大統領) は半旗を掲げてその死を惜しんだ。亡骸はスクール内の日本庭園に埋葬された。

ウィリアム (愛称ウイリー) は17歳まで長崎で育った。友人は武士の子息たちで武士道、礼儀を自然に身に付け日本語の会話、読み書きに不自由はなく剣道には打ち込んでいたという。ミリタリースクールでは剣道が教科に取り上げられた。 以上